

二 天王ばやし（祇園囃子）

（一）概説

祇園囃子と云えば、すぐに京都の祇園祭りに立派な山鉦の上で囃されている囃子と連想されるのであるが、現在の京都の祇園祭りに囃されている、コンコンチキチ コンチキチンの音律の囃子は京都のみであつて地方分布が以外と少ないのである。しかし、全国の祇園祭りを始め種々の祭りに囃されている祭囃子の大半は祇園囃子と称しているものが多く見られ、その伝承地を一様に京都を主張するのであるが、音の内容については全く異にするものなのである。それは貞観十一年（八六九）に始められたとする祇園祭りの永い歴史の中での変遷によるものと思われる。現在の京都の祇園祭りでは、長刀鉦・放下鉦・菊水鉦・船鉦・函谷鉦・月鉦・鶏鉦・北観音山の各山鉦の上で祇園囃子が囃されているが、その囃子の内容については、それぞれ、曲名の違いを見せているものの、その音律は一般の祭り見物の者には分からない程、皆一様の音律なのである。しかし祇園祭りで山鉦を曳く様になり、それに囃子方を乗せた時点から全ての山鉦が同じ音律の囃子を囃していたとは考えられない。それ以前にも色々な芸能集団が祇園祭りに参加して賑ぎやかに踊り囃していた事から、その芸能集団の囃子の影響が、山鉦の囃子にもあつたと思われる。地元の町内のものが囃し方として山鉦に乗つたのではなく、始めは田楽衆などの諸芸人の囃す祇園囃子で、各山とも異

にしたものであつたと考えて良いのではないだろうか。そうした音の中から、京都の人々の生活環境にマッチした現在の音律が残され統一されて来たものと思われる。その元の音をあげると、田楽、獅子神楽、壬生狂言、六斎念仏、能楽、邦楽、等々の囃子である。それらの芸能衆は踊り囃子の中に必ず祇園囃子と称するものをもつていたが、一般の祭り見物の人々、特に京見物の旅の者達には、その何れの囃子も祇園囃子として受けとめられ、それぞれの一芸の音を京みやげの祇園囃子として持ち帰り、村の祭りに囃したものと思われる。その外に、祇園祭りに参加した諸芸人達が地方に遊芸人として流れ、また修験者として諸国を廻り、その村々に自分達のもつ囃し芸の一つとして、或るものは神懸りの神秘をもたせ、また念仏太鼓で祇園の囃子に、あるいは勇壮な獅子の中にも取り入れ、秘芸として祇園囃子を囃していたものと思われる。このことは、自分達が京都の祇園祭りに参加した京の者だという証しとなるものであつたのであろう。

江戸時代に入ると地方でも祇園信仰による祭りが盛んに行なわれる様になる。旅の修験者や遊芸人にとって、祇園のお祇園芸とする祇園囃子はなくてはならないものとなつてきた。彼等の囃す個々の祇園囃子が地方の村々に伝えられ、種々様々な祇園囃子が各地で聞かれる様になつたのである。これらの祇園囃子は江戸でも盛んに囃されていた様であるが、その囃子が祭りに参加したかに付いては明らかではないが、江戸時代の書物に次の様な文を見る事が出来る。

葬式に祇園囃子

八月の初、赤坂裏伝馬町名主五兵衛の伴、千太郎は、放蕩者で名主の役儀を人にゆずり、間近い氷川の花街で遊興三味の果て、ついに酒で命を落した。よって悪友どもが集まり、日頃当人は祇園囃子が好きだったからとて、にぎやかに祇園囃子を囃して野辺の送りとした。

「当年雑録」安永二年

江戸時代になって江戸の祭りが盛んになり、祭囃子も神田囃子の様な音の定着したものが囃される様になると、江戸の祭りで囃される囃子が地方にも流れることとなる。この囃子も地方によっては祇園囃子として伝承されていくこととなる。またこれとは逆に、地方では祇園囃子と同じ音曲の祭囃子を神田囃子と称している所も少なくないのである。したがって地方にはその頃から、祇園囃子、馬鹿囃子、神田囃子が復合されたものが各地で聞かれる様になったのである。地方に分布が見られる祇園囃子系の囃子を区別すると、祇園囃子（人形踊り系と神楽系）六斎念仏系はやし、弥勒囃子、邦楽はやしとなり、祇園信仰とする内容は、京都の八坂神社をお祭りするものと八雲神社（津島神社系）とするものがあり、何れも祇園祭り、または天王祭りとして親しまれているものである。

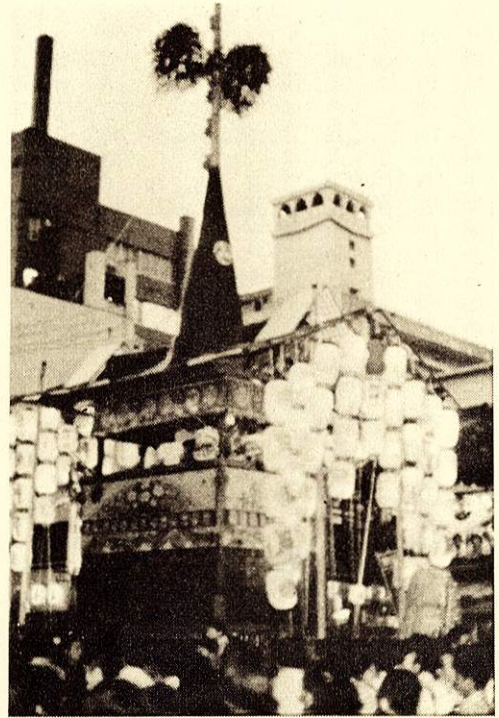
(二) 八坂神社祇園祭り（京都市東山区）

全国の祇園祭りの中心をなす八坂神社は、元は感神院・祇園精舎とも牛頭天王、またや祇園天神ともいわれ、祭り事は御霊会といっていた。御霊会は疫病などの流行で死亡したものをや戦いで非業の死

をとげた死者の霊の崇りと考え、それらの霊を呼びよせて慰め鎮めるための祭りである。またこうした怨霊とする、崇る霊、怨む霊、荒ぶる霊を祓して御霊神として神格化して祓られたものに荒神・山神・日の神・塞の神等があるが、これらの信仰と牛頭天王の信仰が結びつき、素戔嗚尊が祭神となったもので、神仏習合の思想から生れた神社である。祭りも始めは、鎮花祭、疫神祭、祇園天神御霊会、そして祇園会祇園祭りとなったのである。

祇園祭りは七月一日の、吉符入の行事からほとんど毎日の様に神事行なはれ、十三日に鉦曳き初、があり、稚児社参があり、そして十六日の宵山を迎えるのである。宵山には所定の場所に各山鉦が飾られ、夕刻から一斉に祇園囃子が囃し出され、宵山情緒をかもしだすのである。十七日山鉦巡行、午後には、神輿の神幸祭、二十四日花傘巡行、午後、還幸祭が行なはれる、またこの日には色々な芸能が奉納されている。二十八日に神輿洗い、二十九日に神事済み奉告祭が行なはれ、祇園祭りの一切を終了するのであるが、八坂神社では三十一日に、疫神社夏越祭りが行なわれ終了となる。この夏越の祭りは全国の神社で行なわれている大茅輪くぐりの神事で、蘇民将来之子孫也という護符を受け茅輪をくぐると疫病が流行しても病いからのがれられるという信仰のもので、全国的にこれをもって祇園祭りとする所も少なくない。この疫神社の御祭神蘇民将来と素戔嗚尊とが繋がった祇園信仰もあるのであるがここでは少略し、祇園祭りの芸能について記す事とする。

祇園祭りの始めは貞観十一年と伝えられている。発祥年代につい



▲京都八坂神社祇園祭り

長徳四年（九九八）唯芸者無骨御霊会に標山類似の柱を渡す。（本朝世語）

長和二年（一〇一三）御霊会御輿の後に散楽空車あり。（本朝世紀）

大治二年（一二二七）祇園御霊会に四方殿上人・馬長・童・巫女・田楽各数百人に達す。（中右記）

久安三年（一一四七）平清盛宿願を果たさんがため祇園社に田楽を調立す。（本朝世記）

建久七年（一一九六）御霊会に風流あり、馬長二十余年騎。（明月記）

暦応三年（一三四〇）鉾以下以下の外績構、歩田楽あり。（師守記）

貞治三年（一三六四）鉾以下冷然久世舞車あり、作山、風流等なく、定鉾のみ。（師守記）

嘉吉三年（一四四三）鉾山以下風流例の如し。（康富記）

寛正五年（一四六四）北畠跳戈、加賀舞あり。（「季瓊目録」）

以上であるが、この外、「中右記」の永長元年（一〇九六）六月十二日の条には次の様な田楽の賑いがしるされている。

この十日あまり、京都の人々が田楽をして遊興し、昨今は諸宮家の青待下部等もこれに加わり、昼は下人、夜は青待がみな田楽をして道を埋め、鼓笛の声高く、住来の妨となっているが、祇園の御霊会だというので制止することができぬ。

また同じ十四日の条には、

ては種々の設が伝えられているのであるが、年表によると貞観五年となつて居り、その年代の深さを感じ入るのである。次にその年代表の中から芸能に関するものをあげて記す事にする。

貞観五年（八六三）神泉苑において始めて御霊会を修す（三代実録）

貞観十一年（八六九）この年、疫病流行し、卜部日良麻呂、鉾を立てて牛頭天王を祭るといふ、（祇園社本縁録）

貞観十八年（八七六）牛頭天王の社壇を八坂の地に造営す。（祇園社記）

延長四年（九二六）祇園天神祭を供養す（日記略）
承平四年（九三四）祇園感神院の社壇を建立す（二代要記）

午前十時頃参内したが、今日は祇園御霊会のため禁中にも人が居らず、終日祇候した。あとで聞くと院の召仕男女四百人ばかり、院の藏人町童七十余人、内藏人町童部三十余人、田楽五十組出て近代才一の見物であった。

以上の様に田楽が盛んに行なはれていた事が記されており、また「浴陽田楽記」には、この年の夏、京都で田楽が大流行した事が記されている。これらの囃子音が京都の祇園囃子の元となっていたものと思われる。また江戸時代になっても種々の芸能が奉納されていた様であり、次の様な絵番付を見る事ができる。

天保六年末のとし

祇園神輿洗衾里物絵容

明治十一年七月十日二十八日

八坂神社神輿洗衾里もの番附

明治二十六年七月十一日二十五日

奉納 舞囃子姿絵

天保六年のねりもの絵は、歌舞伎踊りの奉納であろうか、花笠をつけ三味線をもった長裾の女性四人を先頭に太鼓打ち、その後から各々の舞踊の衣裳をつけたもの（例えば道域寺の娘姿・牛若丸など）が二段に分けて全部で四十三名が描かれている。明治のもの二枚も三味線の五人が先頭になりその後より囃子屋台（太鼓・小鼓を囃す）が続き、二十四孝の八重垣姫の姿や、宮女姿のものなど七名が描かれその後に、あとばやしの屋台が続いているのである。これらの練り物は、江戸中期頃から始められ江戸末期迄続けられ、幕末の動乱

で一時中断していたが明治四年に復興してその後も続けられていたのである。これによって祇園祭りに邦楽舞踊の奉納のあった事と邦楽系の祇園囃子の元となった証しとも考えられるのである。

次に京都の音として忘れてはならないのが、カンデンデンの囃子で知られている、壬生大念仏狂言と軽快なりズムとダイナミックな至芸を楽しませる六斎念仏踊りである。

壬生大念仏狂言は毎年四月に行なはれているが、春の終りを告げる季節は、散る花とともに恐しい疫病のはやる時期でもある。我々の祖先は、春の花の精が落花を悲しみ恨むあまりに崇りとなって疫病をはやらせるのだと考え、その花鎮めとして、お念仏をあげ諸芸を演じてお慰めするもので、その目的とするものは祇園信仰とかわりはない。この壬生狂言は、カンデンデンの愛称で親しまれているが、カンが金鼓（鰐口）デンが太鼓の音でこれに笛が加わり囃子となるもので一見単純な囃子の様にも思えるものであるが、信仰儀式・鬼退治・世話物・大刀もの・怪獣退治、等々三十種目の無言劇の中には祭囃子を思わせる囃子が沢山出て来るのである。

六斎念仏は平安の昔、空也上人が始めた踊躍念仏がはじめとされているもので、六斎とは、仏教に説く六斎日の事で、毎月の八・十四・十五・二十三・二十九・三〇の六日をいい、悪鬼が現われて人々をおびやかす不吉な日として、この日は謹んでその災いをさげようとするものである。この六斎念仏には千葉系と空也系とがあるが、千葉系は素朴な振りと太鼓打の念仏を中心とするものであり、空也念仏は、発願、結願の念仏にはさまれた形で非常に派手な芸能を

中心として行なはれているものである。演じられているのは、能から取り入れたものが多く見られ、安達原・道成寺・頼光、それに獅子の碁盤乗りなどの曲芸的妙技も演じているものである。そしてまた祇園囃子も盛んに囃している。この六斎念仏系の祭囃子は全国の各所で聞く事が出来る。

以上のように京都の祇園祭りには如何に大勢の、また多種類の芸能が奉納されていたかを知る事が出来る。そしてそれらの一芸の一囃子が、京見物の人々の京みやげとなり、また参加した諸芸人により京都祇園祭りの囃子として、地方の村々に伝承されて行ったものであり、地方の祇園囃子の音の種類が多い事を示すものである。

(三) 津島神社信仰と囃子(愛知県津島市)

西多摩地方には八雲神社が数多く見られる。これらの八雲神社は何れもその本社とするのが津島神社なのである。多摩地区での津島御師(神宮代理符を配布)の行動が盛んであった事が、津島神社に残る御師の丹那場帳に見る事が出来る。津島神社は元々津島牛頭天王社と称しており、今でも津島の天王さままで親しまれている大社である。御祭神は素戔鳴尊(牛頭天王)であり、祓いと神葎流(かみながし)の神事を中心とした天王祭りが毎年七月に行なわれている。天王祭りには三百六十五個の提灯を丸い傘形につけならべた、車楽船(ぐるまがねぶね)を天玉川(現在池になっている)に五艘浮かべて津島笛の囃子を乗せて船渡行するのであるが、京都祇園祭りに優るとも劣る事のない祭りが行なわれている。



▲津島神社祭り(だんじり)

また、この津島神社の信仰は、伊勢信仰とも相まっていた。それは伊勢参りの人々が行きか帰りか、この津島神社に参拝しなければ、伊勢の片参りと称して伊勢参りにならなかつたともいわれている。津島御師の地方での活動は伊勢御師以上ともいわれ、津島神社の御分霊は全国三千社にも及んでいる。

(四) 伊勢大神楽の祇園囃子

伊勢大神楽の獅子舞は、伊勢神宮の神符をもって全国を訪ずれ、家毎にカマド祓いの獅子舞をして伊勢の神符を配布し、伊勢信仰を広めて歩いた獅子舞を主とする信仰芸能集団である。現在でもその本拠とする三重県桑名市太夫町には山本源大夫他数組の神楽講社があ

り、毎年十二月中旬には、地元の益田神社に集まり合同で獅子舞や種々の演技を奉納して盛大な祭りを行なっている。この伊勢大神楽は古い歴史をもっており、幕末の頃には、祭主下の神職荒木田孫福太夫の配下として獅子神楽を行なっていた。現在では伊勢大神楽講社を組織して、昔と変らぬ自分達の丹那場を毎年一回訪れる獅子舞の旅を続けているのである。

江戸が徳川家康によって開府され、町が整って繁栄してくると色々な旅芸人が江戸に集まって来るようになるが、伊勢大神楽も早々に江戸を訪れ、稼ぎ場としていた。また一方では江戸の祭りの神輿行列のお先祓なども勤める様になっていったのである。これらの伊



▲桑名大神楽

勢大神楽は祭りには、神事舞の鈴の舞・四方の舞・跳の舞・扇の舞の獅子舞を行ない。その外に、綾採の曲・水の曲・吉野の舞・手毬の曲・楽々の舞・傘の曲・献燈の曲・剣の舞・神来舞・玉獅子の曲・凧三番叟・等々の多芸を演じていたのである。しかも献燈の曲では伊勢神楽独特の祇園囃子が囃されていたのである。またこの祇園囃子に極類似の囃子が西多摩地方に散在するのである。伊勢信仰とする獅子神楽囃子の中に祇園囃子を聴く事は異様とも感じられるが、これは茅の輪神事から蘇民将来、牛頭天王の信仰が習合されたものとも考えられる。(伊勢地方の家々の門(玄関)には「蘇民将来子孫者也」との張り符と縄がしてある)以上の様な事から伊勢大神楽による祇園囃子の流れについても見のがす事は出来ないのである。

(五) 福生天王ばやし

福生の天王ばやしのその発祥地及び発祥年代については今回の調査期間中に明らかにする事が出来なかったが、京都の祇園祭り、また江戸の神田祭りに囃されていた囃子と同曲であるものと思われる前にも述べた様に江戸時代江戸の人々が祇園囃子に親しんでいたこと、またこの天王ばやしとほぼ同じ音曲の囃子を神田囃子と称している所もあること、その地の古老から神田祭りに囃していたものを覚えて来て伝えたという伝承を聞く事が出来ることからいえることである。

現在、福生の天王ばやしと同系と思われる天王ばやし、または祇園囃子を囃している地区は、東京では、武蔵村山市・日の出町・羽村町、東京近県では、茨城・千葉・神奈川・埼玉の各県である。これらの地区のはやしはいずれも華やかに囃す音ではなく、神輿についで渡御の囃し、または祭り行列の先頭を行くお祓いの囃子となつてゐるのである。近県の同系の囃子と見られるものは次の様な状況（芸能）のもとで囃されている。茨城県つく舞・千葉県かつき屋台・神奈川県鎌倉市・埼玉県江戸系祭り囃子等である。

つく舞は龍ヶ崎市（茨城県）の八坂神社の祇園祭りに奉納されるものである。広い道の中に白布を巻き付けた約十七メートルの太い柱を立て、これを太い綱で三方から張り支える。それに雨蛙の面を頭にのせた若者が弓矢をもってよじ登り、頂上の丸い台座の上に立つて、四方に弓矢（破魔矢）を射つて悪魔はらいの行事を行なう。

その後台座の上で逆立ちなどの芸を見せ、下の囃子方の囃子に合せて綱渡り、空中回転などサーカスの如きスリル満点の曲芸を演じるものである。このつく舞は雨乞いと五穀豊稔を祈願するものであるといわれているが、この芸能は、貞治三年（一三六四）京都の祇園祭りに、久世舞車の奉納のあつた事が記録されている事から、その名残の芸能と思われるものである。或いは囃子もその時代から久世舞車の渡行（演ずる場所を移す）囃子として囃されていたものとも想像する事が出来る。またこの囃子は龍ヶ崎市の街中で囃している神田囃子系の囃子とは全く異にする音曲の囃子であり、つく舞のみに囃されて居る事にも注目したい。

次に里見八犬伝の物語りの発祥の地として知られている房総半島の山中の里、千葉県富山町山田地区の祭りであるが、福生の天王ばやしと類似した祇園囃子が囃されているのである。山田の屋台は昔の神輿を思わせる造りものに、飾り人形（歌舞伎の名物面）を置いたものであるが、これは京都の祇園祭りの飾り山を真似たもので、その造りは誠に素材なものである。その屋台を約六メートルの丸太棒二本の中央部に乗せ、後部に大太鼓を付け、大勢の若者によつて担がれ練り歩くもので、囃子方はその後ろから囃しながら歩いて行くのである。その囃し曲は、祇園囃子・こくちよう囃子・きりん・しのた・たてかわ・すみよしが伝承されている。またこの練り物は関東地方では唯一のもので、これに似たものを丹後半島（京都府）地方の祭りに散見する事が出来る。約六、七メートルの二本の丸太の中間に榊と大太鼓を乗せこれを打ち囃しながら勇壮にねり歩くものであるが、大昔、唐の国から位のあるものが日本海を渡り、船から陸に上陸する際に使用されたものが原形ともいわれている。

また東京都稲城市の青渭神社獅子舞の中で行なはれている、七度の迎への行事と全く同じ形式の天狗の神輿迎への七度半の行事が、丹後半島地方の祭りでも行なはれているのである。これなども江戸の祭りで行なはれていた事を聞かれない事から、やはり京都の祭り、或いは古くから丹後半島の祭り行事として行なはれていたものを、修験者などにより伝えられたものと考えられるのである。

そうした京都の祇園祭りに奉納されていたと思われる田楽をはじめ、種々の芸能が現在の丹後半島の民俗芸能の中に残されている。福



▲丹後の神楽



▲つく舞（龍ヶ崎市）



▲鳳凰の舞

生の天王ばやしに良く似た音律の囃子がこの地方の獅子神楽の中に見られる。丹後半島の村々に分布を見る獅子神楽は、種々の奉納芸（笹おどり大刀振り他）の中で行なはれるものと、家毎に祈禱舞をして歩くものがあるが、その何れもの渡行囃子が福生の天王ばやしと良く似た音を出しており、それらの囃子音が元であったと思われる。

以上の様な、京都、またその周辺の芸能が旅の修験者や神楽師、遊芸人により、繁栄を見る江戸の街にもち込まれ、それが定着していったものであろう。しかし、生活環境の変化と祭り行事の移り変わりの中で江戸の祭りの中から自然に消えたものと思はれる。何れに

しても、京都祇園祭りに囃され、江戸の祭りにも参加していた貴重な天王ばやしである事に間違いはない。

二

福生市とその周辺には、江戸系祭り囃子とともに祇園囃子系統の囃子が伝わっている。福生市ではこの囃子を、かつて天王様の祭りで囃されていたことから「天王ばやし」、または太鼓の奏でる音律から「カッター・テンテン」、「デンテン太鼓」などと呼んでいる。構成は太鼓（径60cmの大大鼓を二人または四人で両面からたたき）と笛（五人〜十人）から成っている¹¹⁾。この囃子は戦前まで夏祭り（八雲神社祭礼）には欠かせないものであったが、祭りの形態の

変化、さらに江戸系祭り囃子の普及にともない衰退し自然に消えて
いってしまったものである。しかし、この囃子の哀調切々とした調
べを復活させようと、昭和五六年「福生天王ばやし保存会」が結成
され、保存と継承の活動を行っている。

福生の天王ばやし（元は祇園ばやし、或は岡崎ばやしともいった）
がいつ頃どのようにして福生に伝わったか、それを知る資料は今の
ところ発見されていない。天王祭りの変遷の項で述べたが、昔長沢
の佐藤家の人が京都に行き祇園囃子を習い、それをこの地に伝えた
ものという伝承、又この囃子は元々獅子舞の時に囃していたもの（
熊川神社宮司野口泰道氏）という伝承があるのみである。

この囃子は、近隣の羽村町の祇園ばやし、或いは日の出町平井の
鳳凰の舞道行囃子など、非常によく似たものがあるが、多少調子が
違っている。笛から見ても、福生が六穴であるのに対し、羽村と平
井では七穴のものを使用している。七穴の笛は通常祭り囃子で使用
するものである。

明治の初期に福生にも祭り囃子（重松流）第三章参照）があったと
いわれているが、直ぐ消滅してしまい天王ばやしとの結びつきは認
められない。羽村や平井では祭り囃子と同時に継承され、そのこと
から祭り囃子と同じ七穴の笛を使用しているものと思われる。

笛の特徴

一般に祭り囃子の笛は七穴であるが、福生天王ばやしは六穴で
上部の穴は竹紙をはり微妙な音を出させる。

頭部に象牙の筒がつき（竹紙入れにもなっている）、下部には絹

糸の房をつけ、上下のバランスをとっている。これは笛の平衡
を保ち静かに吹くことを意味している。

太鼓の調子とり方の一部

カッカアデンデン カッカアデンデン

カカカアッカアカアアカアデンデン

明日盆だ 明日盆だ

うんまい饅頭がくうえる デーデンデン

（最後の一節）

おかざき ひやらの

おっびきひやのひやらのいやーいやー

おかざき ひやらひやらほーろほろ

いやあー

太鼓について

昔は小太鼓はついていなかったが、あまり太鼓の角をたたくと皮
がいたむので大正になってから小太鼓をつける様になった。カ
ッカアデンデンの「カッカア」はその太鼓の木部をたたく時の
音の表現である。

太鼓は丁度大相撲のふれ太鼓の様に二人で担いで歩いたが、太鼓
はそれより一回り大きかったので、時々交代しないと担げなかつた。
従って時々地上に置いて威勢よくたたいた。

笛吹きは最低六、七人はいた。

ザンザラをつけた花笠をさげ、静かに歩きながら六、七人揃って

笛を奏する光景は誠に見事であった。

笛吹きは高学年が多かった。子供達の祭りには高等科二年を卒業すると参加できない。従って笛が満足に吹ける様になる頃卒業してしまうことになる。笛を吹くという事は特殊な技術を必要とし誰れでも吹けるというものではない。吹ける者は三年でも笛吹きにし、六月から七月の準備期間に夢中になって毎晩の様に練習をした。こうして天王ばやしは子供だけで受け継がれてきた。

昭和十五年以降戦争が激化し、そして昭和二十年終戦を迎える。この時期子供達は、お祭りの準備に集まることも、笛や太鼓を練習することも次第になくなり、天王ばやしも消えて行った。

現在笛を吹く事ができる人達は、殆んど昭和十五年以前に少年期を過ごし、天王ばやしを習い奏していた人である。

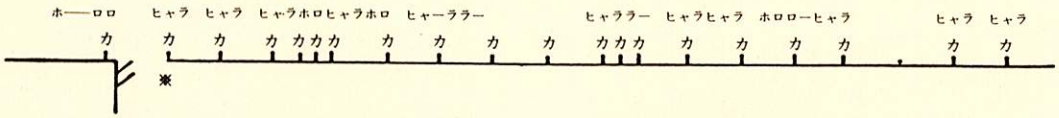
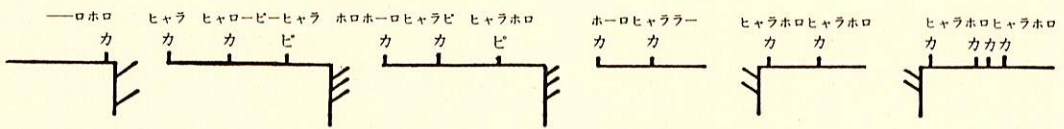
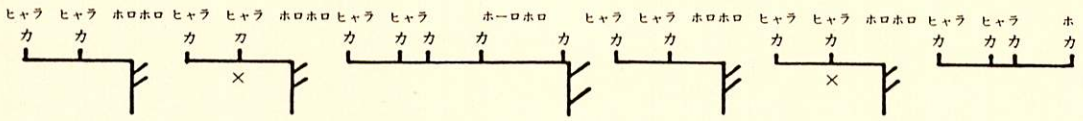
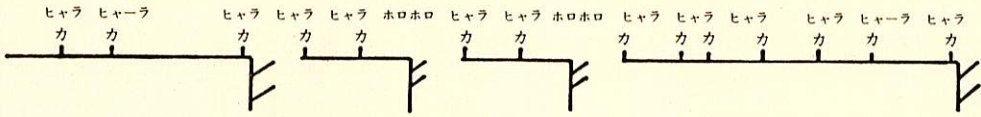
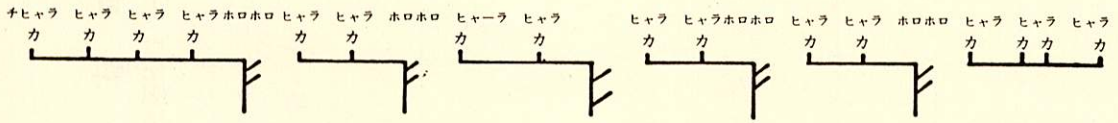
(橋本)

註(1) 昭和初年、大太鼓の上に締め太鼓二つを乗せ交互にたた

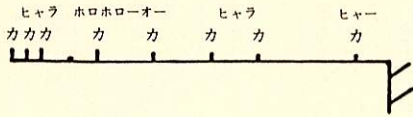
く様になった。この太鼓をたたきながら歩くわけだが、これには棒に太鼓を吊して前後で担ぐ方法と、台車に乗せそれを引いて歩く方法の二つがあるが、引いて歩く方法は戦後になって始められたものである。

註(2) かつて福生地区、熊川地区に獅子舞が行われていたとい

うことは記録資料としては発見されていない。しかし熊川神社には獅子頭(三匹獅子舞に使われていたもの)が残されており、さらに福生地区の宝蔵院にも獅子舞がかつて行われていたという伝承がある。

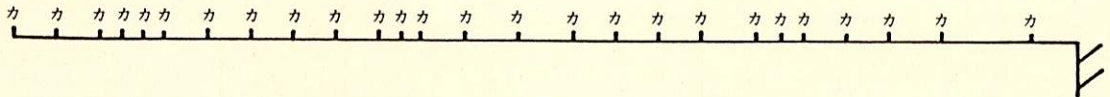


× 長沢地区ではこの音をたたかない。

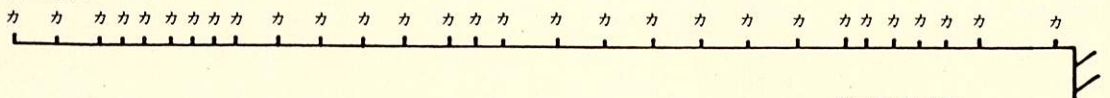


長沢、本町地区では※の部分は次の様に伝承されている。

(長沢地区)



(本町地区)



窪田成司氏作譜



カ カ カ カ デンデン カ カ



デンデン カ カ デンデン カ カ デン デン カ カ



デンデン カカカ カ カ カカ デンデン カ カ



デンデン カ カ デン デン カ カ カ カ カ カ デンデン



カ カ ビ デン デン デーン カ カ ビ



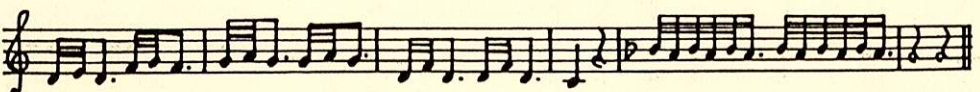
デン デン デーン カ カ デン デン カ カ デンデン



カカカカ カ デンデン カ カ カ カ カ カ



カ カ カ カカ カカ カ カ カ カ カ



カ カ カ カカ カカ カ カ カ カー カー デンデン